

臨床実習

チーム医療のメンバーとして診療に参加し知識を身につける。

診療参加型の臨床実習（クリニカル・クラークシップ）では、3～4名の小グループに分かれ、日本医科大学付属病院をはじめとする4病院の各診療科を1～4週間かけて、すべてまわります。診療チームの一員として朝のカンファレンスから参加して病棟回診や手術見学なども経験。医療面接法、診断の流れ、基本的な手技、医師として相応しい診療態度などを身につけていきます。医の倫理、安全性、コミュニケーションなどにも重点が置かれ、臨床能力の高い医師を育成します。

海外の医療現場を体験し、人として成長する海外臨床実習

臨床実習（クリニカル・クラークシップ）をさらに発展させた6年次の選択臨床実習では、学外の提携病院や、海外の大学や大病院で実習を行うという選択肢も用意されています。海外の医療技術を学び、医療従事者や患者さんと触れ合う経験は、医療・医学への視野を広げる上で大きな財産となります。



ハイレベルな技術を備えた医師と最新の医療設備から学ぶ

高度救命救急センターでの救急医療、遺伝子診断、臓器移植などを実施している日本医科大学付属病院、日本最先端のメディカルコントロール体制を備えた千葉北総病院をはじめとして、本学付属の4病院におけるクリニカル・クラークシップで最先端医療に触れることは、非常に貴重な体験となります。



特別プログラムを設置して国家試験合格をバックアップ

医師国家試験対策として「学生アドバイザー制度」や「チューター制度」などで日常的に支援します。6年次には国家試験対策のための特別プログラムを設け、実習の合間に講義を受けられるカリキュラムを配置。学生と教員が一体となって合格率の向上に取り組み、過去5年間の医師国家試験新卒受験者の平均合格率は94.8%となっています。



主要科目紹介

救急医学

救急患者の入院から治療までの流れを体験し、病態の理解、臨床技術を深める



担当教員 横堀 将司 大学院教授

2005年日本医科大学大学院医学研究科修了。1999年日本医科大学付属病院高度救命救急センター。2000年国立病院機構東京災害医療センター脳神経外科。2001年武蔵野赤十字病院脳神経外科。2003年日本医科大学付属病院高度救命救急センター。2010年米国マイアミ大学医学部脳神経外科客員研究員。2020年日本医科大学大学院教授。

本学の救急医学の特徴は、患者さんの初期診療から根治手術、そして集中治療までのトータルケアを行う、いわゆる自己完結型救急医療にあります。多発外傷や広範囲熱傷、脳卒中、急性循環不全など、救命処置や集中治療が必要な重症患者さんに対し、初期治療からリハビリテーションまで一貫した診療実習を行います。バイタルサインのチェック、血液ガス分析、各種画像診断、呼吸・循環管理など、患者さんのいのちを繋ぐ基本知識と技能を修得します。また学生は医療チームで働く多職種との関わりの中で、将来のチームリーダーとなるべく倫理観や態度を学びます。座学ではシミュレータやバーチャルリアリティなど、多彩な教育ツールを活用し、リアリティのあるアトラクティブな授業を展開します。さらにドクターカー同乗実習を通して救急現場からのよどみない診療をすることで、教科書では学べない緊迫感を体感します。災害医療や緊急医療支援などの講義や実習を通して、本学の学是である「克己殉公」の精神、病める人々に尽くす心を涵養します。

循環器内科学

専任の病棟医の指導のもとに、原則として新規入院患者さんを受け持ち、基礎データ、問題リスト、初期計画、診断的計画、治療的計画、教育的計画および経過記録などの作成を行い、その最終経過記録までの全行程を実地に学修します。担当する患者さんにおける検査、治療などには介助あるいは見学の形で参加し、その目的、方法、結果の分析、評価などを自ら積極的に学修することが必要です。なお、教授・准教授の病棟回診では自らが担当した症例のプレゼンテーションやディスカッションを行います。

形成外科学

形成外科学（広義）は診断学よりも治療学が中心となることが多いため、形成外科で扱う疾患の診断学は、関連診療科の知識が必須となります。実習中は、学術・臨床カンファレンス、抄読会（Journal Club）、縫合実習に参加します。また病棟での診察、処置、手術に参加し、症例報告のレポート作成・課題提出を行います。形成外科の実習で特に大切なのは、創傷治療と、外科手技の基本を学ぶことです。将来どここの科を専門として選択したとしても、本実習で学んだことは必ず役に立つことでしょう。

小児科学

たとえば小児科医は手術は行いません。手術は外科医の役割です。また内科医として地域医療に従事する場合、子どもは一切診ないと地域の信頼を得るのはかなり難しいでしょう。眼科でも耳鼻科でも精神科でも小児を診療する場面があることを理解することが必要です。本実習では小児医療の実際を体験することで患児、患者家族への医師としての適切な対応と小児の健全な育成の理解ができるようになるために、診察態度、小児の代表的な疾患の知識と問題解決能力の修得を目標としています。

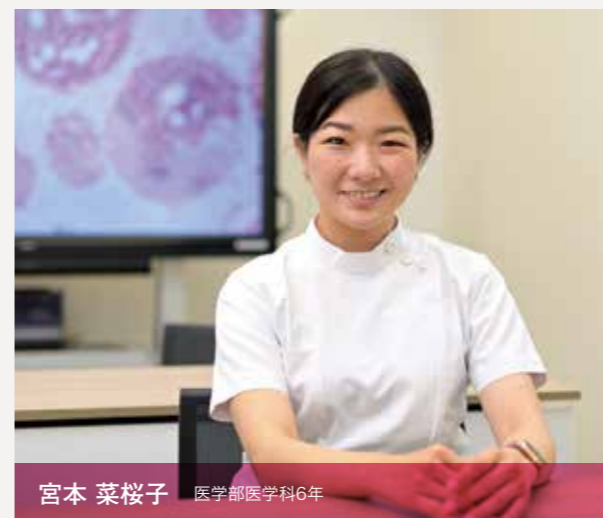
STUDENTS VOICE



市来 直也 医学部医学科6年

患者さんとのコミュニケーションに自分の成長を実感

6年次の今、卒業試験、マッチング、国家試験と乗り越えなければならない多くの壁を前にして、勉強漬けの毎日過ごしています。すべての勉強が国家試験合格につながっていると思うので、ここで得た知識は将来必ず役に立つと信じて取り組んでいます。日本医科大学でのこれまでの日々を振り返って感じるの、医学の知識はもちろんのこと、患者さんとのコミュニケーションスキルを磨くことができたという点です。入学したばかりの頃は自分が患者さんと話す姿をまったく想像できませんでした。しかし4年次のOSCEや臨床の現場で患者さんと接する医師の姿を見て、何をどのように聞いたらいいのかというポイントを学べました。そのため6年次の臨床実習では患者さんとスムーズに話せるようになり、将来への自信を得ることができました。日々の学びを積み重ねていくことでいつの間にか成長している自分に気がつく、そんな環境がここにはあります。将来は循環器内科医を目指していますが、高い専門性を持ちつつもほかの領域の知識も幅広く身につけた医師になりたいと考えています。



宮本 菜桜子 医学部医学科6年

同じ志と誇りを持つ先輩たちとのつながりを大切に

私が日本医科大学を選んだのは、多浪生、再受験生も分け隔てなく受け入れてくれると感じたからです。一度は弁護士を目指して法学部に進んだ私でしたが、幼い頃から医者への夢を諦めきれず、思い切って医学部に挑戦することを決心。誰に対しても門戸が開かれていると感じた本学に入学しました。その印象はずっと変わらず、自分が再受験生であることを意識することは今までまったくありませんでした。また最近、日本医科大学の歴史の古さに誇りを感じるようになりました。先輩が全国の病院で活躍しており、後輩が困ったときはすぐに手を差し伸べてもらえるという安心感はとても心強いものです。長く受け継がれてきた環境のなか、同じ志を持った仲間としての太いつながりは、大きな財産だと感じています。私自身は産婦人科の実習で緊急帝王切開の手術に入らせてもらったことで、産婦人科医を目指したいと思うようになりました。そして公衆衛生の勉強を通じて少子高齢化や医療の偏在といった現状への問題意識も抱くようになりました。将来は周産期医療を通じてこうした課題の解決に貢献できる医師を目指したいと考えています。

学生たちのメッセージ動画をホームページで公開中!

